

<実践報告>

京都産業大学ギャラリーと附属中学校・高等学校歴史部との実践報告 2 —生涯学習社会における博物館教育/博学連携の可能性について—

中尾 健二¹

京都産業大学附属中学校・高等学校歴史部と京都産業大学ギャラリー（博物館相当施設）とは、平成 28（2016）年度から現在に至るまで連携・協働した取り組みを行っている。本稿は令和 2（2020）年度にギャラリーが開催した企画展において、歴史部の生徒が取り組んだ編みカゴ及びかわらけづくりのワークショップ、博物館展示の考察及び展示マップの作成、ハンズオン展示鑑賞及び探究活動についてまとめた実践報告である。生徒がモノづくりや資料観察及び他者との対話を通じて知見を広め、探究心やモノに対する付加価値を創出していったことが感想文から分かる。その取り組みの準備から展示に至るまでの活動と感想について記録・分析し、明らかにされたことを報告することで、博物館教育、中高大連携、博学連携における実践研究の蓄積を図ることが本稿の目的である。

キーワード：博物館教育、中高連携、高大連携、博学連携、生涯学習

1. はじめに

本稿は「京都産業大学ギャラリーと附属中学校・高等学校歴史部との実践報告—生涯学習社会における博物館教育/博学連携の可能性について—」（京都産業大学教育支援研究開発センター『高等教育フォーラム第 13 号』2023 年 3 月/以下、前稿）の続編である。前稿では、京都産業大学ギャラリー（博物館相当施設/以下、ギャラリー）と附属中学校・高等学校歴史部（以下、歴史部）とが連携するに至った経緯及び 2016（平成 28）年度から 2019（平成 31/令和元）年度にかけて連携・協働で行った取り組みと成果について報告した。その内容は、展示鑑賞や展示解説（ギャラリートーク）への参加及びワークショップを通じてモノ（資料）やワザ（技術）に直接触れることで生徒に見られた意識や行動の変化をまとめ、生涯学習社会における博物館教育/博学連携の可能性について述べたものである。特に 2019 年度の大嘗宮の模型制作における歴史部とギャラリーとの連続的、双発的取り組みでは、資料や図面を見ながら自分が作った/作っているモノを観察してその特徴を探し、そのモノがもつ価値や意味を見いだそうとする姿が見られた。その姿勢は大学におけるアカデミックな学びや高校における日本史探究/世界史探究の授業に繋がるものであった。2020（令和 2）年度以降も現在に至るまで、歴史部とギャラリーとの連携は継続して行われている。本稿は 2020 年度に行われた双方の連携・協働した取り組みについて、準備から展示に至るまでの活動と感想をまとめ、その実践から得られた学びについて報告することで、博物

館教育や中高大連携、博学連携における実践研究の蓄積を図ることを目的とするものである。

2. 企画展「山口吉彦コレクション」における連携—編みカゴ・展示マップの制作及び展示について考える取り組み—

2020 年 9 月 28 日～11 月 30 日、ギャラリーでは、第 20 回企画展「山口吉彦コレクション おと・いる・かたち—南米から日本へ—」が開催された。企画展は、文化人類学者の山口吉彦氏がワシントン条約加盟（1980 年 11 月 4 日締約）以前にアマゾン川流域で生活する先住民から収集した楽器やアクセサリを中心に構成され、山口氏が同地域を調査した際の生活を撮影したフォトコレクションも紹介された。本展示で歴史部は 3 つの活動を行った。1 つ目は編みカゴづくりワークショップへの参加及び作品展示、2 つ目は博物館展示の考察及び展示マップの作成、3 つ目はハンズオン展示鑑賞と探究学習へと続く取り組みである。

2.1. ワークショップ準備と新型コロナの大流行

前年度に実施した大嘗宮の模型制作では、打合せから作業に至るまでの準備時間を十分に持つことができず、実際の作業時間や事前事後の学習時間を十分に確保することができなかった。この経験を踏まえ、今年度は企画展開催半年前の 4 月 27 日にギャラリー室長、学芸員及び筆者とで今年度の連携に関する具体的な打合せを行った。その内容は、秋に開催予定の南米ブラジル・アマゾン川流域に住む人々の生活に関する企画展示におい

¹ 京都産業大学附属高等学校

て、附属中高生を中心に身近な素材を使って楽器づくりやアクセサリーづくりなどのワークショップを行い、事前にアマゾン川流域で生活する人たちについて皆で学習するという内容であった。また、参加者を歴史部に限定せずに他の部活や附属中高生全体に募り、高大接続及び博学連携の輪を広げていこうとするものであった。しかし、ワークショップの実現までには困難な日々が続いた。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の大流行に伴い、3月2日以降、学校は総じて臨時休業状態にあったためである。感染拡大防止のため、生徒は自宅での自習やオンライン授業の受講、教員は在宅が中心の勤務、ギャラリー職員は分散出勤という状態が続いた。調整をすすめていたワークショップへの参加生徒の拡大についても、各部にはそれぞれの活動事情があり、連続的/双発的な取り組みに理解を得ることは難しかった。有志参加については管理責任の所在に関する問題があった。

6月8日から本校では学年ごとに時間差による分散登校が開始されたが、コロナ禍の状態は続いていた。こうした状況下の6月20、25日にコロナ禍でどのようなワークショップが行えるのか/どのように行うのかについて、再度ギャラリーと打合せを行った。密閉・密集・密接の三密の回避や個別の取り組みを行うこと、道具の共用をしないこと、消毒やマスク着用の徹底を図ることなどを確認する一方で、「複数の知恵が交錯することで学びの質が深まり、新しい価値の創造につながる取り組みがしたい」「モノづくりを通じてワザ（技術）について学び、身近な生活とモノづくりとが結びつく取り組みにしたい」など、様々な意見が出された。最終的にラタン（籐）で編みカゴをつくることにした。その理由は、カゴは時代や地域にとらわれない普遍的かつ日用的な道具であり、日用品として使用されているもの/使用されてきたものを制作することにより、その歴史の変遷や地域性、社会活動を知ることにつながると考えたからである。また、集団での取り組みが困難な中で個人での制作が可能であること、実用的なものから装飾的なものに至るまでその形や大きさに個性がでやすいこと、編み方を共通にすることで作業中に他者と比較し、学び合うという協働の作業の場がつけられると考えたからである。加えて制作後にお蔵入りするのではなく、日用品として活用できるものであるという理由もあった。ラタンを素材として選んだのは、身近にある網製品に使用されている/使用されていたことが多く、加工もしやすいためである。ワークショップの内容が決まって以降、早速準備に取りかかった。その行程（予定を含む）は、以下の通りである。

①下見（日付/内容）

- 6/28 若狭三方縄文博物館見学（縄文の編み物見学）
- 7/19 たくみ工芸（兵庫県豊岡市）、玄武洞ミュージアム見学（豊岡杞柳細工見学及び作業工程動画視聴）

- 8/ 1 ラタン家具専門店カルチュラタン見学（工房見学及び山川譲氏の門人による談話）。コロナ禍により中止。

②試作（日付/内容）

- 6/29、7/9 底づくり。米字組み、素編み、追いかけ編み
- 7/10、20 側面の立ち上げ。追いかけ編み
- 8/ 5、20 側面の編み込み。追いかけ編み
縁止め、縦芯始末

③材料収集（6月後半～9月中旬）

- 【ギャラリー】バケツ、はさみ、カッター、カッターマット、メジャー、せんたくばさみ、クリップ、消毒用アルコール
- 【歴史部】ラタン（丸芯、自然色、2.0mm）、霧吹き、ぞうきん、ボンド、マスキングテープ、トラヨウの葉

2.2. 編みカゴづくりワークショップ

7月30日、浅子里絵学芸員から本企画展とワークショップの目的についての説明後、カゴの材料となる素材（柳、麦、木の皮、麻等）や今回使用するラタン（ヤシ科。熱帯アジア、北オーストラリアに野生）、「編み」の歴史（日本では、鳥浜貝塚や粟津湖底遺跡で縄文時代草創期の編みものの痕跡を確認。弥生後期の瀬田遺跡で「四方結びの箱」付き（脚付き）の実用的な編カゴを確認など）についての学習会を開催した。その後、以下の行程（図1）でワークショップを実施した。ワークショップには12名（中学生6名、高校生6名）が参加した。

(7/30 浅子学芸員による説明、勉強会)
8/27 制作するカゴのイメージスケッチ、編み芯切断（ラタンの切断）
9/1、3、8 底づくり/組み始め…米字組み、素編み、追いかけ編み（図2-左）
(注)「製品（籐籠）ができるまで」（籐製品の福島工業株式会社、 https://fskk.jp/publics/index/55/ ）を参考にした。
10 側面の立ち上げ…追いかけ編み
15、17 側面づくり（立体を編む）…追いかけ編み（図2-右）
24 縁止め…縦芯始末
25 トラヨウの葉を用いたキャプション制作
(注) トラヨウの葉は表面を傷つけると、葉に含まれる成分のタンニンが急激に酸化し黒くなるため、文字を書くことができる。
29 展示作業

図1. 行程

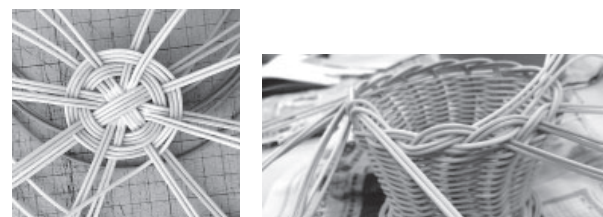


図2. 編み込み

- 左：底編み（米字組み、囲い編み）
- 右：本体編み（追いかけ編み）、縁止め
（写真は京都産業大学ギャラリーより提供）

6月末から8月にかけて学芸員と筆者とで行った試作を通じて、底を作る際に米字にラタンを組み(縦芯)、形が崩れないように編みはじめるという作業が想像以上に困難であることが分かった。片方の手で土台の中心を押さえながら、米字を崩さずに編み込んでいく作業は非常に力のいる作業であった。また、追いかけて編みとは二本の編み芯を用いて交互に編み込んでいく技法であるが、ラタンが同色のために混乱しやすいこと、編み芯が長いと編みはじめが混乱すること、側面の編み始め(立ち上げ)はラタンが固く曲げにくいことも分かった。職人が制作した籐カゴ、杞柳細工は技術が高く、まさに「職人技」であることを学んだ。ワークショップ開催にあたって、底をつくる際の補助は必要だが、その他の作業は自分たちで調べ、学び合い、試作品を見たりしながら進めることを基本方針とした。試作作業を通じて、植物を使用して編むという行為をいったいどれほどの中高生が体験したことがあるのだろうか、素材の性質をいかし、どのような工夫をして編みカゴをつくるのだろうか、編むという先史時代以来存在する行為を通じて自分自身とアマゾン川流域で生活する人たちによる「網み」の技法の違いや共通性をどこに見いだすのだろうか、という取り組みへの新しい視点も加わった。

編みカゴづくりは、1回あたり2時間の時間をかけ、合計7回行った(図3)。制作された編みカゴは、企画展の入口付近に展示され、個々の作品の前にはタラヨウの葉に綴ったキャプションを置いた(図3、4)。キャプションには、作品名と制作者、見どころが記されている。その内容からワークショップでは大別して、編みカゴ制作に係る技術的なことと作品の装飾的なことに生徒の意識が働いていたことが分かる。技術面では、「編みはじめが難しく土台が変になってしまったけれど、だんだん楽しくすることができました」「底の作りははじめの編み方がわからなくて苦労しました」「すき間を空けずにラタンをつなぎあわせるところが難しかったです」「一番苦労したのは側面の部分です。特に規則的に編み込むところは難しかったです」「箱のように周囲の側面を立たせるのに苦労しました」「立ち上げていくことが難しく、つつい横に広がる作品になってしまいました」「大きな作品をつくったので時間がかかりました」などと記されていた。また、装飾面では「最後の縦芯をどうやってまとめるのか悩みましたが、アサガオのツルのように芯を捲いていくことを思い付き、きれいにまとめることができました」「中にいれるフルーツが見えるように浅く作りました(フルーツバスケットを制作)」「逆さまにするとクラゲに見えるように作りました」と記されていた。編みカゴ制作にあたり、「編み」の難しさや装飾の工夫、ラタンの性質に苦労している様子が伝わってくる。また、感想には記されていないが、制作中には継ぎ芯や縁止めの処理方法についても、苦労と工夫を重ねていた。自らの創造力で解決し

てほしいことは、自分たちでその方法を考えさせた。結果として、縁止めに際して「アサガオのツルのように芯を捲いて」処理する方法を思い付き、形にした生徒もいた。編みカゴづくりを通じて、ワザについて知り、考え、モノに付加価値をつけている様子が確認できた。

一方、今回のワークショップには課題が残った。キャプションは、ワークショップの感想を200字程度にまとめ、さらに展示に際して最も見てほしいところを30字前後にまとめ直して作成したが、ワークショップを終えた時点で、アマゾンで生活する人たちや身近に存在する編みカゴと比較して感想を述べた生徒はいなかった。7月30日の説明会では、アマゾン川流域に住む人たちの生活を知り、その文化について考えるための企画展の一端として、編みカゴ制作のワークショップを行うと説明している。アマゾン川流域で住んでいた人たち/住んでいる人たちは、「編み」の技術を用いてどのような道具をつくったのか、どのような装飾を施したのか、どのような工夫が見られるのか。今年度はワークショップで体験したことを単なるラタンでカゴ作りでは終わらせずに、実際の展示物を鑑賞することで、編みカゴや「編み」の技術と私たちの生活、アマゾン川流域で生きる人たちや縄文時代に生きた人たちの生活と私たちの生活とを結び付ける学びへと繋げることが取り組みの目的である。前年度に実施した大嘗宮の模型制作では、制作過程で生じた様々な発見について、実存する建物や生け垣を見て、その類似性や差異を検討していく予定であったが実現できなかった。今回の取り組みでも、展示物を制作することで終わり、その作業を通じて生じた疑問を展示と絡めて考えるところに行き着くことはできなかった。

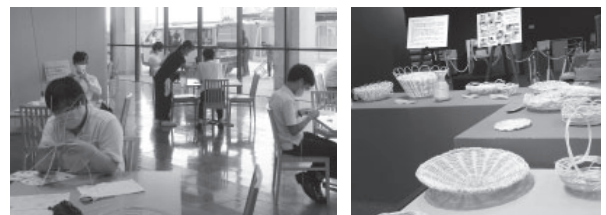


図3. ワークショップの様子と展示された編みカゴ
(写真は京都産業大学ギャラリー提供)



図4. タラヨウの葉に綴ったキャプション
(写真は京都産業大学ギャラリー提供)

2.3. ギャラリートークと展示マップの作成

前項で述べた課題とあわせて、筆者には博物館の学校教育への活用や生涯学習の視点から博物館展示について考える場をもちたいという思いもあった。その背景には、当時ギャラリー室長であり京都産業大学文化学部教授であった鈴木久男氏（以下、鈴木教授）との対話がある。大嘗宮の模型制作時から中高生の博物館利用や中高生とアカデミズムについて話をする機会が増えていた。附属高校の教諭としては、大学につながる／つながる学びについて考えることは必然のことであり、高校の学びも知識・技能の獲得型から知識活用型の探究学習への移行が強く求められていた。例えば『高等学校学習指導要領解説（2018年告示）地理歴史編』における「歴史総合」の「内容とその取扱い」の箇所には、「日本や世界の様々な地域の人々の歴史的な営みの痕跡や記録である遺物、文書、画像などの資料を活用し、複数の資料の関係や異同に着目して、資料から読み取った情報の意味や意義、特色などを考察し表現することにより、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解すること、資料を取り扱う際の留意点に気付くことを主なねらい」とすると記されている。

こうした意識のもと、本企画展における継続した連携活動をギャラリーに提案し、合意を得ることができた。その活動内容・目的及び行程は、以下の通りである（図5）。

【内容・目的】	
①	ワークショップで知り得たことを、展示物を通して世界や先人の文化とつなげて考える。
②	展示物を鑑賞し、展示会場で自らが見たモノ・コトについて可視化する。（学芸員、教員にとっては、中高生がどのように展示を見ているのかについて知る）
③	個々が可視化したモノ・コトを共有することで、多面的なものの見方があることに気づく／気づかせる。
④	専門家（学芸員）の解説を聞き、自分の解説との違いや共通性を見だして、展示には展示者の意図があることに気づく／気づかせる。
④	展示マップを作成し、中高生が見た展示について表現する。来館者に展示の見方の一例を示す。
【行程】	
10/20	博物館展示について考える（1） アマゾンのイメージ・知りたいことを書き出す（10分）／企画展鑑賞（30分）及びワークシート記入（20分） 【印象的な展示物とその理由、展示を見て生じた疑問、より良い展示とは？】、生徒間で感想の共有
/22	博物館展示について考える（2） 3チームに分かれ、展示案内マップ（下書き）を作成（60分）／各チーム展示解説練習（30分）
/27	各チームによる展示解説及び他チーム、学芸員、教員からの講評と振り返り（30分）／浅学学芸員による展示解説（30分）／鈴木教授によるうなり板の解説（30分）、編みカゴ観察（30分）、振り返りのワークシート記入【各チームの報告を聞く前後で生じた意識の変化について／各チームの展示マップについて／学芸員の解説について／うなり板について／展示された編みカゴと自分がつくった編みカゴを比較して】
/29	うなり板（複製）のうなり実験
11/ 5、10、12	博物館展示について考える（3） 展示マップの作成／グループごとに再度展示解説／ワークシート記入【前回の発表と今回の発表における意識の変化】

図5. 内容、目的、行程

10月20日、企画展鑑賞前にワークシートを配布し（内容は図5参照）、10分程度で生徒にアマゾンについての「イメージ」と「知りたいこと」を書いてもらった。その後、ワークシートに従い展示鑑賞を行った。

アマゾンの「イメージ」は、「ジャングル、先住民族（孤立部族）、原始的」といった内容がほとんどであり、「知りたいこと」は、「その暮らしと文化、自然環境、観光開発の現状」であった。そして展示鑑賞後の生徒の感想には、「住んでいる環境や価値観が違うのにモノの仕組みや発想は似ている」「とても緻密に（道具が）できており自分では再現できない」といった原始的イメージとは異なる回答や「甲羅や骨が使われているものが多くて面白い」「おもに生き物を使って楽器や道具を作っている」「多種多様な生物とともに生活している」「展示物だけで生活を知ることができなかったが、生態系を知ることができた」と、私たちの生活との差異や共通性を指摘しつつ、その生活文化を相対化し受けとめているものが多かった。一方で、「動物の顔や骨をそのまま使っていたりしていて趣味が悪い」とその文化を「趣味が悪い」と評するものもあった。

「印象的な展示物」については、鑑賞者11人が1人3点ずつ選択する形式をとり、結果として21点が選ばれた。選択形式を取り入れたのは、中高生の興味がどこに集まるか（人気投票）ということではなく、展示物を1点ずつ丁寧に見て欲しかったからである。しかし、選択結果には1つの方向性が見られた。生徒の関心が最も集中したのは、展示点数の多い楽器やアクセサリではなく、家型のカゴだったのである。その理由には、「どれくらい時間をかけてつくったのか知りたいから」「家の形に整えながらつくるのには相当時間がかかったのではないかと思ったから」「なぜ、家型のカゴをつくったのか知りたい」「カゴなのに横からしか開かないつくりなのは何故なのか」「鳥かごとして糞が下におちる工夫があり、天敵が入れないような工夫もある」など、ワークショップを行ったからこそ見えてくるような理由が綴られていた。その他の展示物を選択した理由は、「発想が面白い」「きれい」「実用的」「絵が興味深い」といったものが多かった。

「より良い展示とは？」については、「実際に楽器を使用する体験ができたなら良かった」「環境破壊とアマゾン文化の存続の危機という視点が欲しい」「制作された年代が分からないので現在の私たちの生活との比較がしにくい」という指摘がなされた。最近流行のコト体験（体験学習）やマイノリティの視点から展示（ほぼ同時期に国立歴史民俗博物館で企画展「性差の日本史」が開催され、話題になっていた）、制作年代の指摘は、展示を「見せる側（つくる側）」にとっては、参考になる。また、「もっと詳しい説明がほしい」という声が多かった一方で、「あえて記さずに見学者に考えさせた方がよい」という指摘もなされた。

10月22日は、部員を3チーム（各チーム3～4人）に分け、2つの課題をだした。「中高生の君たちが伝えたい来館者向けの展示マップを作成せよ」「1チーム10分で、本企画展のギャラリートークをせよ」の2つである。課題を出した直後、生徒はチームで話し合いをしていたが、暫くしてギャラリーに移動し、展示物の確認をはじめた。その方法は、個々それぞれで確認をするチームとリーダー的な存在がいて、あれやこれやと指示をだすチームとに分かれていた。また、多くの生徒が展示物を中心に配置図を記していくなかで、大雑把に楽器ゾーン、アクセサリーゾーンと記し、展示資料の絵を丁寧に描いている生徒がいたことは興味深かった点である。文字を記す生徒がいれば、絵を描く生徒、キャプションを写す生徒と多様であった。それらを持ち帰り、チームごとに展示マップの下書きが作成された。

10月27日は、各地チームが作成した展示マップを全員が手にして、展示会場でチームごとにギャラリートークを行った。「説明やイラストがついていて分かりやすい」「余白を何かに活用したらよい」「各チームの説明を聞いて、展示物の見方が少し変わった」「キャプションに書かれたことをただ説明しているだけ」「意識していなかった展示物に注意して見学できるようになった」「もっと自分の感想をいれて話せばよいと思った」「同じ展示物を見ていても、見方が違っていった」「展示物への理解が深まった」などの意見がだされ、他者の報告を聞くことでモノの見方や考え方が深まっていく様子が分かった。生徒自身によるギャラリートークの後で、学芸員による展示解説を聞いた。その解説については、「道具の背景について逐一解説をはさんでいて分かりやすかった」「違う方向から物事を見られるようになった」「自分たちの考察と異なる解説があり、見るだけで判断してはいけないと思った」という感想が寄せられた。資料価値を判断する際には、多面的な考察が必要であることを生徒自らが述べている。一連の取り組みを経て、展示マップは次第に完成度を高め、一般来館者にも配付することにした（図6）。

2.4. ハンズオン展示鑑賞から探究学習へ

10月27日は、展示解説に加えて、編みカゴ及びうなり板に直接触れ、質感や重量感を感じるハンズオン展示鑑賞も行った。コロナ禍であり、直

接手で触れたものをそのまま共有することはできない。一方、資料をアルコール消毒することもできないし、消毒した手で資料に触れることも望ましくない。手袋をつければ滑りやすくなるし、触感も変わる。こういうときは原点回帰である。コロナ禍を問わず、資料保存の観点からきれいに洗った手で資料には触れるということを生徒に話し、文化財の保護と活用についての話をした後で、ハンズオン展示鑑賞をすることにした。展示されている編みカゴを手にした生徒は、「立ち上げがうまい」「隙間を空けずに（均一感覚で/規則的に）編みあげている」「継ぎ目がどこにあるのかわからない」「継ぎ目の処理が見えないように上手に処理している」「白黒と交互に編み込んでいるのに、交互でない場所がある。白と黒で編んだのではなく、塗ったのだろうか」など、ワークショップでの体験を踏まえ、自分で制作した作品と比較して感想を述べていた。また、うなり板については「持った感触はずっしりと重く、展示を見ただけではわからない重量感が伝わってきてびっくりした」という触れることで知り得た感想や「本当に音が出るのか」「どうやって音をならすのか」「振り回してならすというが、この重い板をどうやって回すのか」「削った深さによって音は変化するのか」と、展示ケースの中で陳列されていたときには出てこなかった質問がだされた。

10月29日は、うなり板はどのように使用するのか/音を出すのかについて実験してみることにした。鈴木教授（当時）と筆者は事前にそれぞれ大小のうなり板を復元していた。展示物のうなり板には中央上部に穴が開いており、この穴に紐を通して、紐を手にして板を振りまわすと音がでるのだろうと考えていたが、実際に回しても原寸大の大きいモノは音が出ない（図7）。実物を再観察すると板の端に欠損が見られた。そこで、複製したうなり板の端に穴を空け、糸を通して、板を回すと「うなり音」が出たのである。この違いはどこから生じたのかという新しい疑問が生まれた。学芸員が実験の様子をスロー撮影し、動画再生をして確認すると、中央部に穴をあけたうなり板の場合とは異なり、端に穴をあけたうなり板は自らも進行方向に対して回転していることが分かった。

実験後の感想には、「展示されていたうなり板（複製品）は、重たくて音が鳴らすのが難しいこと

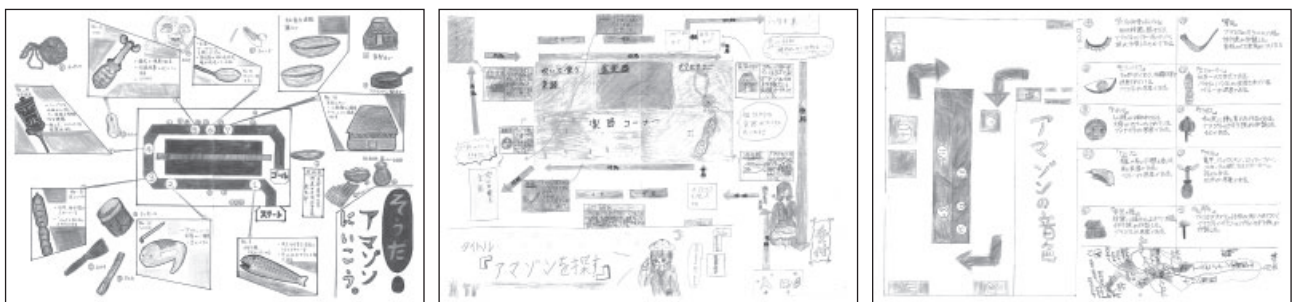


図6. 展示マップ

がわかった」「大きさや素材を変えると音が変わることがわかった」「音の大きさと板の回転(ねじれ)は関係するのか?」「ひもの長さが違うと鳴る音は変わるのか?」「中央部に空けられた穴はなぜ開けられたのだろうか?」という感想が出された。実験を通じて、生徒は新しい知見を獲得するだけでなく、新たな探究の扉を開いていることが分かる。

その後、インターネットを使用して「うなり音」について調査をすすめると、長崎県立西陵高校科学部(2017)「オセアニアの伝統楽器「うなり木」の動きと音の関係を解き明かせ!」(『みらいぶ』、河合塾)、大阪教育大学「うなり」『実践学校教育講座(天王寺キャンパス)種村研究室』の記事を見つけた。板を振りまわすことにより発生する「風きり音」と、板自身の回転により発生する音との周波数が異なり、それが同時に鳴ることであるうなり音が出るという。残念ながら、うなり音が発生する原因を自ら解明する時間は持てなかった。



図7. うなり板と実験の様子
(写真は京都産業大学ギャラリー提供)

2.5. 博物館展示について考える

11月5、10、12日の3日間は、展示マップの清書及び再発表(ギャラリートーク)を行い、一連の取り組みは終了した。振り返りシートでは、「前回の発表での講評を受けて、今回の発表や地図作成で意識的に変化させた部分はどこか」という設問に対して、「自分たちが見て分かるということではなく、どんな人でも見て伝わるようにした」「説明文を多くしたり、カラーにしたりして、視覚的に伝わるようにした」「絵を入れた」「地図と解説とを分けた」「来館者のためにマップに展示の順路をつけた」「双六形式で楽しそうにした」「イラストそれぞれにコメントをつけた」「自分自身のことばで話す(書くよう)にした。」と見る側を意識したコメントが寄せられた。他者の発表を見たり聞いたりすることで、単に自ら調べたことをまとめ、伝えるだけでなく、どうすれば伝わるのかという視点にまで踏み込んでいる様子が伺える。個人の学びから相手を意識した学びへと変化していることが分かる。

3. 企画展「新嘗祭と歳旦祭」における連携

2020(令和2)年12月17日～2021(令和3)年2月6日、ギャラリーでは、第21回企画展「新嘗祭と歳旦祭－酒と神事の関わりを読み解く－」が開催された。企画展は、神事と関わりが深い酒

について、新嘗祭(大嘗祭)と白酒・黒酒、歳旦祭と屠蘇をテーマに賀茂御祖神社や賀茂別雷神社等が所蔵する関連資料を中心に展示が構成された。本展示で歴史部は、古代・中世に酒盃や灯明皿として使用されたかわらけづくりを行った。

3.1. 準備

第20回企画展における博学連携/高大連携活動の取り組みの一方で、11月5日に内藤唯学芸員(当時)と筆者とで今企画展におけるギャラリーと歴史部との連携継続とその内容に関する打合せを行った。翌6日には鈴木教授(当時)、川上万尋学芸員(当時)も交え、その内容を具体化し(目的、工程、準備物、コロナ対策)、1週間後の11月12日には生徒対象の勉強会を開催した。わずか1週間で準備を可能とした背景には、過去4年間に積み重ねてきた双方の深い関係性があったことはいまでもない。限りある時間の中で何ができるのか、中高とギャラリーとがそれぞれどのような役割を担うのか、どこまで準備すればよいのか、生徒はどのように動くのかなど、ある程度の予測がたつ関係性が成立していた。両者が双方の年次計画(予定)を概ね理解しているといったこともあげられる。本企画展では、ワークショップとしてかわらけ(土器)づくりを行い、その作業を通じて、かわらけの歴史や職人の技術力の高さに迫ること、京都のかわらけ文化について知ること、可能な限り忠実に復元することを目的とした。ワークショップという行為/手段を目的とするのではなく、ワークショップを通じての学びを目的とすることを同時に理解し合えたことも関係の質が高いことの現れだろう。準備の行程は以下の通りである。

①下見(日付/内容)

- 11/ 8 木野愛宕神社及び周辺、栗栖野瓦窯跡見学
- 11 かのき学園見学(かわらけ制作の現場見学)
- 20 京都アスニー見学(土師器皿、杯、盞見学)
- 12/12 下鴨神社(神撰用古式土器見学)

②試作、道具づくり(日付/内容)

- 11/16 うつげ(円板)、ほへ(布きれ)づくり
- 16、17 かわらけづくり

③材料(11月前半～12月上旬)

- 【ギャラリー】新聞紙、ブルーシート、バケツ、タライ、コースター、粘土(11/9 浅田製瓦工場、三河産赤土)、ろくろ(11/7 鈴木研究室より移動)、消毒用アルコール
- 【歴史部】粘土板、ぞうきん、ふきん、ビニール袋(70ℓ、簡易エプロンとして使用)、串、麻布、コースター、たこひも、針金

3.2. かわらけづくりワークショップ

11月12日、鈴木教授から本企画展の概要及びワークショップ「木野のかわらけづくり」と焼き物の変遷について、筆者から「現代のかわらけづくり－かのき学園を例に－」についての説明後、縄文・弥生古墳時代に制作された土器に直接触れ、その用途や技法について考える学習会を開催し

た。その後、以下の行程（図8）を組み、ワークショップを実施した。ワークショップには、13名（中学生7名、高校生6名）が参加した。

11/17 勉強会（山城幡枝の土器）、かわらけづくり（手づくねの技法）
19 かわらけづくり（手づくねの技法）
11/23 幡枝フィールドワーク（コロナ禍により中止） （24～12/1 コロナ感染拡大防止のため本校休校） （12/2～ 期末考査1週間前、期末考査期間のため部活動停止）
12/14 窯入れ（800℃で焼成。電気釜を使用）
16 窯出し、展示作業
20 企画展鑑賞（川上万尋学芸員による展示解説）
1/26、28 かわらけづくり（手づくねの技法）
2/1、2、4 ろくろを使用して、かわらけ、つば、埴輪づくり

図8. 行程

11月17日は、かわらけづくりをはじめ前の勉強会を開催した（図9）。島田貞彦「山城幡枝の土器」（『考古学雑誌第21巻第3号』、1931年）をテキストにして、木野・幡枝（京都市左京区岩倉）における土器制作の変遷、土器の種類（大きさ）、土器制作の順序（技法）、幡枝土器の特徴についての学習を進めた。中高生にとって難しい文章であり、一言一句、丁寧に訳しながら文章を読み進めた。共有した内容は以下の通りである（「」内の文章は上記論文からの引用文であるが、分かりやすいように改めた箇所がある）。

変遷について、「木野に於いては古くから土器の制作が行われていて、其の制作的技術は古代土器制作を窺い知ることができる。応仁年間に嵯峨から幡枝に移住し、さらに元亀年間に今の地（木野）に移り変わった」とあり、その制作技法は古代にまで遡れる可能性がある。

土器の種類について、「明治維新に至るまで土器制作の御土器司榎木丸太夫として朝廷に土器を納めた。榎木家の『御用日記』によれば、1845（弘化二）年3月8日石清水八幡宮に三度350枚、同撮60枚、大重160枚、間2枚ほかを納め、榎木家所蔵の調進見本により、一度は特に「大重」（土器の内面に一線の円周を引いたもの）または「小重」（引いてないもの）と呼び二分五寸、三度は径約4寸という」と記されている。テキストには、「便宜上、『小重』を作ることとする」とあり、その制作の順序が書かれていたため、ワークショップにおいても小重をつくることにした。

制作の順序については、以下の通り記している。

- ①「採取した植土（ハネツチ/粘土）を所要の分量だけ小分けにし、軒先の平石、または平板の上で十分にコネ廻す。」
- ②「平板の上に粘土塊を載せ、その右に『みごろ』（水桶）、『うつけ』（田板）、『ほへ』（布切れ）等を置き、左方には土器を乾燥させる板を敷く。」
- ③「（小重をつくる）『小重』に要する粘土を土塊から摘手する。この小粘土を両手で丸め、更に

やや平たくして左の手掌に受ける。」

- ④「この小型の粘土を右手の臂（肘）の関節に軽くうちつけ、ほぼ皿形の器形を得るまでこの動作を反復する斯くしてできた坏形を『あせもん』と云う。臂に晒木綿の籠手をはめて置く。」
- ⑤「『うつけ』と称する径約六寸（大小種種あれど大体に於いて四寸から六寸位。桜の材を使用）、厚五分位の木製板を右手の母指にはさみ、ほぼ水平の位置にして左手の掌にて前記の皿形（あせもん）を円板の一端に宛てがい、この円板を上下に軽く動かして皿形粘土を更に薄く大きく延ばす。この時、円板の一端をときどき水桶（みごろ/径六寸、深さ二寸強）に浸して、土器の密着を防ぎ適当の水分を与える。この円板を使用する目的は円く薄くのばすことで、坏形の器形は寧ろ左手の指先の動作によって深く器面を凹める。」
- ⑥「この不格好な形状を仕上げる最後の手法として、右手の『ほへ』（手織りの布、長さ二尺位のものを幾重にも折り畳みて『藁すべ』にて其の中央部を縛っている）にて左掌にある土器面を軽くおさえ撫でながら回転しつつ成形する。この場合、布目の痕跡が丁度ろくろを使用した様に付加される。」

特徴については、「最も古式の手法である手づくねが伝統的に最も神聖なものとして、特に祭器とするところである」としている。また、「他の機械的作品（ろくろを使用した土器）と比較して、清浄の潜在が含まれているものであると考えられる」と記している。



図9. 説明会の様子とかわらけづくり
（写真は京都産業大学ギャラリー提供）

論文を読み、制作技法を学んだあとで、可能な限り忠実に当時の制作技法を用いて「木野のかわらけ」の制作/復元を行った（図9）。「平板」には粘土板を、「みごろ」にはタライを使用し、「うつけ」は筆者が円形の木製やコルクのコースターや卓球のラケット、ベニヤを工作して作った。また、「ほへ」は布を糸や輪ゴムで止めて作った。制作を進めると順序⑤がうまくいかない。「上下に軽く動かす」と粘土とうつけが接合し、離れなくなる。無理な力をいれれば、穴があく。東（2017）は、「『円板を上下に軽く動かして』という表現が誤解の根源となる。なぜなら団扇で上下に煽るような行為では決して作れないからである。そうではなくて水平の位置にある円板先端の中軸を中心に右手首で捻りながら円板左右両端をシーソーのように上下させて回転させる」ことで、「薄い皿形に挽

き延ばされて丸く成形されてくる」と述べている。確かに回転させることで粘土塊は、薄く丸く成形された。かわらけづくりに慣れてきた生徒は、島田論文を基礎としつつも自らうまくつくれるような工夫をし、結果として「臂よりも拳の方が作りやすいのに、なぜ臂なのか」という疑問をもつ生徒も出てきた。鈴木教授（当時）が2010年11月25日、2011年6月15日の2回にわたる藤木卓蔵氏からの聞き取り調査で、母藤木イチ氏が昭和40年代前半まで、ときどき請われてかわらけ制作の実演をしてことが分かっているが、現在そのワザを継承している家は存在せず、真相は分からない。実際に拳でカワラケをつくっていた家があるかもしれない。島田論文以降、いくつか研究論文は出されているがその数は少なく、今後そのことが明らかにされる可能性も高くはないだろう。11月19日にも⑤の作業には苦勞しつつ、どうすれば迅速かつ綺麗に作れるのかと考えを重ね、かわらけづくりを行っていた。自分たちの成形したものと実際に制作されたものを確認するために祝日を活用して、フィールドワークの機会をもつことにした。

11月23日（祝）のフィールドワークは、半日を使用して、木野愛宕神社、公民館（榎木氏 [明治維新に至るまで代々土器制作の御土器司榎木太夫として家業を継いできた家系] からお話を聞く、復元窯、かわらけ見学 [かわらけの誤差2mm程度]）、藤木邸にある岩（ハネ石と思われる岩。かわらけ作りにつかう粘土であるハネツチをつくるときに使用する）、延喜式にも記載のある栗栖野瓦窯跡、妙満寺（幡枝）の見学を行う予定であったが、コロナ感染拡大防止のため、中止することになった。翌24日から12月1日までの期間、本校は休校となり、休校明けには定期考査もあり、展示前のかわらけづくりは、1回あたり2時間の取り組みを2回で終わらせることになった。それでも1人あたり5～10程度のかわらけを制作することができた（図10）。残念ではあったが、鈴木教授と筆者とで12月14日～16日にかけて、窯入れ、窯出しを行い、16日のうちに展示作業を終えて、17日の企画展開催日を迎えることになった。

2022年1月26日～2月4日にかけて、5回にわたりワークショップの続きを行った。今回は、ろくろの使用も含め自由に造形物をつくった。生徒の感想を見ると「ろくろを使用することで、綺麗につくることができる」「回転させることで造形が滑らかに行える」などの感想が寄せられた。さらに「ろくろを用いた方が綺麗に作れるのに、木野のかわらけ職人が手づくねにこだわった理由は何故か」という問いを立てる生徒もいた。手づくねとろくろの使用という異なる制作技法を通じて、探究の扉が開かれたことが分かる感想である。

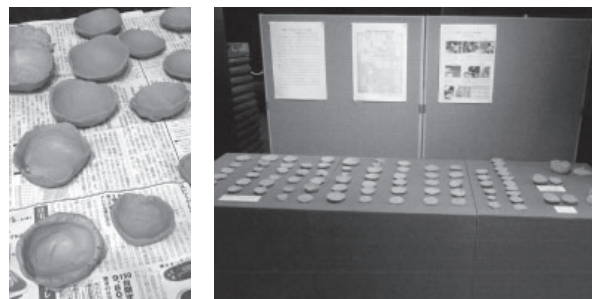


図10. かわらけと展示されたかわらけ
(写真は京都産業大学ギャラリー提供)

4. 生涯学習社会における博物館教育 / 博学連携・高大連携の可能性について —一連の取り組みの中から見えてきたこと—

前稿に続いて本稿では、歴史部とギャラリーとが連携・協働した取り組みについて記した。博学連携に関して、小中高と大学、小中高と博物館とがそれぞれに連携して活動に取り組む事例は見られるが、企画展開催ごとに週2回程度の時間を割り、双方向的・連続的に取り組む事例は本校/本学を除いて見聞したことはない。取り組み内容については、稚拙な部分もあり不十分な点も多いであろうが、博学連携における高大連携、特に附属中高をもつ大学の博物館との実践事例の1つとして示すことはできるだろう。

それではなぜ、ここまでの取り組みができたのかについて考えると、まず双方の立地があげられる。附属中高の校舎とギャラリーのあるむすびわざ館は同一敷地内にあり、廊下1本でつながっている。ギャラリーとの都合さえあれば、筆者の授業時間の合間や休憩時間に部活動の打合せをすることが可能である。また、生徒の移動が容易なことも大きい。交通費や見学費用が掛からないこともあるだろう。

続いて、人の存在があげられる。ギャラリー室長は資料の収集・保存、調査・研究だけでなく、教育に関しての関心が高かった。筆者もモノ資料/モノ教材を保管し、専門的職員（学芸員）のいる博物館の学校教育への活用については強い関心を抱いていた。教育や表現活動に関心をもち、両者をつなぐ役割を果たしてくれた学芸員や施設担当職員の存在も大きい。小川（2019）は、「使命、教育システムが異なる機関における連携では、①相互の理解②つなぐシステム③理念の共有が重要である」と述べている。①について「教員と学芸員の相互理解を高めること、すなわち相互のミュージアムリテラシーの向上（教員の場合、博物館に対する興味・関心を高め、理解を深め、学校教育での活用に関する能力を涵養すること。博物館側は学校がどのようなことを望み、協働で授業を実施したいのかなどについて理解をし、その手立てを用意すること）」としている。②について「学校と博物館をつなぐシステム、博物館の資料と教育

課程をつなぐこと、さらにそれらをコーディネートする人材を養成し、上記の課題をクリアして連携を円滑にできるようにすること」としている。③について「課題を学校と博物館両者で認識し、連携の意義と理念を共有すること。連携することが目的でなく、連携の目的、意義を共有することが重要である」としている。本稿を読むと、この全てが揃っていることを窺い知ることができよう。①については、学校教育機関と社会教育機関という枠組みや対称が異なる機関ではあるが、博物館を活用した教育への関心が高いという視点が一致していた。②については京都産業大学の卒業生であり、学芸員としてギャラリーに勤務し、中高の教育に興味関心を示す学芸員がいた。③については、ワークショップにおけるモノづくりを目的とするのではなく、モノづくりを通じてワザ(技術)について学び、身近な生活とモノづくりとが結びつく取り組みを目指すという点で考えが一致していた。2016年度から4年間の継続した取り組みがあり、双方の立地が近く、打合せの機会に恵まれていたこと、そもそも両者が博物館を活用した教育活動に関心をもっていたことは大きい。

現在の歴史部とギャラリーとの関係は、組織による必然性より生まれたというよりは、むしろ偶然性の方が高い。恒常的な博学連携を進めるためには、組織として整備していく必要があるだろう。こうした状況は他館にも認められ、現在、継続した博学連携を進めるため、国立科学博物館をはじめとして、いくつかの博物館は、教員の博物館への関心を高めるためのプログラムを用意している。国立歴史民俗博物館は、ホームページに「先生のためのれきはく活用」を掲載し、先生の博物館に対する理解を深めて、学校教育での活用に関する能力を涵養する取り組みを行っている。S×UKILAM(スキラム)連携は、小中高の教員や教育委員会などの学校関係者(S)、大学・研究機関(U)、公民館など地域の施設(K)、企業(I)、図書館(L)、文書館(A)、博物館・美術館(M)などの関係者が集い、多様な文化資源を子どもの学びに資するために協働するコミュニティをつくり、年に3回程度の教材開発のワークショップを行い、多様な資料を学校の授業で使える試みを行っている。

小川はさらに「これからの博学連携の可能性」について、「学校では、明確な目標の下、教育課程に基づく体系的、組織的な教育活動が展開され、(中略)一方博物館では教育課程がなく、個人の自由意志に基づく自由選択学習が可能である」としたうえで、「学校、博物館は、それぞれにおいて育成できる資質・能力について共通理解し、連携し、子供たちの未来を切り拓く資質・能力を育てていくことに期待したい。博学連携は子供たちの自由選択学習のきっかけであり、生涯学習のはじまりでもある」と述べている。

一方、高大連携に目を向けると、名古屋(2017)は、哲学カフェという人生や社会に関する本質的で根源的な問いを通じて参加者が思考を深めてい

こうとする活動のなかで、私立大学の大学生の言葉を事例として「『大学入試までは、いつも決められた選択肢から正解を選ばされてきたのに、大学や社会人になった途端、自分で考えて主体的に行動しろと言われる。そう簡単に人は変わりませんよ』と苦笑しつつ、哲学カフェの魅力を語ってくれました」と紹介している。高校生を約10年間追跡する「学校と社会をつなぐ調査」の企画・分析を行った溝上(2018)は「大学1年生前期の学習成績(GPA)が3年生、4年生の学習成績と相関関係がかなり高いこと」を指摘し、「大学1年時の主体的な学習態度は、(中略)高校2年生時のキャリア意識に大きな影響を受ける」としている。また、他者理解力、計画行動力、コミュニケーション・リーダーシップ力、社会文化探究心の4つの資質・能力について、「高校2年生時における4つの資質・能力は、大学1年生のそれぞれの資質・能力に大きく影響を及ぼす」とし、高校2年生時の過ごし方がその後の人生に大きな影響を与えていることを指摘している。歴史部についていえば、高校生時にギャラリーと行ったワークショップが契機となり、史学科に進み学芸員を目指すことを決めた生徒もいる。

最後に部活動と教科学習についてであるが、文化庁は、2018(平成30)年12月に「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(以下、ガイドライン)を策定している。ガイドラインによると「部活動は、現行の学習指導要領においてその意義や留意点が明記され、新しい中学校学習指導要領(平成29年3月告示。平成33年(ママ)4月施行。)及び新しい高等学校学習指導要領(平成30年3月告示。平成34年(ママ)4月施行。)においても、『学校教育の一環として』行われるものであり」とした上で「『学校教育の一環として』行われるものである以上、留意すべき点があり、新しい中学校及び高等学校の学習指導要領では、『教育課程外の学校教育活動と教育課程の関連が図られるように留意するものとする。』として特に部活動をあげ、こうした教育的意義は部活動の充実の中のみで図られるのではなく、教科や特別活動をはじめとする教育課程内の活動との関連を図る中で、その教育効果が発揮されることが重要であることを示している」としている。ガイドラインでは、「こうした教育的意義」については、人間関係の構築や自己肯定感を高めたりするなど生徒の多様な学びの場として記されており、部活動の「場」と教科学習や特別活動における「場」とが関連を図る中でその教育効果が発揮されていくことが重要だとしている。特に2017年に改訂された小学校・中学校の『学習指導要領』および2018年に改訂された『高等学校学習指導要領』では、社会/地理・歴史、理科、図画工作・美術、生活、総合的な学習/探究の時間における博物館の活用は明記されており、特別活動においても社会教育施設という表現が明記されている。筆者自身の課題として今後は博物館教育の場を部活動だけな

く、教科や特別活動の時間にも広げていく必要性がありそうである。

歴史部とギャラリーとの連携は2021年度以降も現在に至るまで続けられている。2021年度には大原の立体模型を制作して京都文化博物館で展示され、2022年度には400年以上前に制作されたと考えられる檀王法林寺所蔵のクバ団扇の復元を行い、琉球新報で紹介された。その取り組みについては別の機会に報告したいと思う。

参考文献

- 東洋一 (2017) 「木野・幡枝カワラケ (土師器皿) 製作技法の復元的研究」『洛央 研究紀要』11
- 文化庁 (2018) 「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkakatsudo_guideline/h30_1227/index.html (取得 2023.09.01)
- 溝上慎一 (2018) 『高大接続の本質「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』学事出版, 東京
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年3月告示)』株式会社東洋館出版社, 東京
- 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成29年3月告示)』株式会社東山書房, 東京
- 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領 (平成30年3月告示)』株式会社東山書房, 東京
- 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領解説 (平成30年告示) 地理歴史編』株式会社東洋館出版社, 東京
- 長崎県立西陵高校科学部 (2017) 「オセアニアの伝統楽器「うなり木」の動きと音の関係を解き明かせ!!」『みらい』河合塾 <https://www.milive.jp/live/2017sobun/ph208/> (取得 2023.09.01)
- 中尾健二 (2023) 「京都産業大学ギャラリーと附属中学校・高等学校歴史部との実践報告－生涯学習社会における博物館教育 / 博学連携の可能性について－」『高等教育フォーラム』13
- 名古屋隆彦 (2017) 『質問する、問い返す 主体的に学ぶということ』岩波書店, 東京
- 小川義和 (2019) 「博学連携は何のために」『生物教育』60(3)
- 大阪教育大学 (1999～) 「うなり」『実践学校教育講座 (天王寺キャンパス) 種村研究室』<https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~masako/exp/kichu/experiment/theory/unari.html> (取得 2023.09.01)
- 島田貞彦 (1931) 「山城幡枝の土器」『考古学雑誌』21(3)

The Potential in Academic Collaboration to Enhance Student Experiences in a Society of Lifelong Learning 2: A Report on the Collaboration between Kyoto Sangyo University Gallery and Kyoto Sangyo University Junior and Senior High School History Club

Kenji NAKAO¹

Kyoto Sangyo University Junior and Senior High School and the Kyoto Sangyo University Gallery (Facility Equivalent to Museums) have collaborated since 2016.

This report summarizes the workshops for making woven baskets and *kawarake*, the discussion of museum exhibits and the creation of exhibit maps, hands-on exhibits, and inquiry activities undertaken by the history club students during the special exhibition held by the gallery in 2020.

It is clear that the students have broadened their knowledge, and developed a spirit of inquiry and an understanding of value of objects through making things, observing materials, and talking with others. The goal is to record the activities from data related to them as part of practical research in collaboration between junior and senior high schools, as well as between high schools and universities.

KEYWORDS: Museum based education, Cooperation of junior high school, senior high school and university, Cooperation of museum and school, Lifelong learning

2023年12月5日受理

1 Kyoto Sangyo University Senior High School